

平成 21 年 6 月 22 日現在

研究種目：基盤研究（C）  
 研究期間：2007～2008  
 課題番号：19500550  
 研究課題名（和文）主婦のスポーツ活動促進モデルの検討

研究課題名（英文）

Research regarding Implementation of the Promotional Model for Women's Sport

佐藤 馨 (SATO KEI)

びわこ成蹊スポーツ大学・スポーツ学部・准教授

研究者番号：50326592

研究成果の概要：既婚女性のスポーツ活動を積極的に推進するための効果的な方策を検討するため、20～65歳の男女2,000名にアンケート調査（2008年3～4月）を実施。個人の余暇に対する意識や行動（余暇志向性尺度）を因子分析し、6因子を抽出。因子得点でクラスター分析を行ない5つに分類。その中でスポーツを推進するのに効果的なグループとしてスポーツを日常的に行なっていないが関心・興味は低くない「平準型」が浮かんた。このグループは専業主婦が有意に多かった。

交付額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2007年度	1,100,000	330,000	1,430,000
2008年度	1,300,000	390,000	1,690,000
年度			
年度			
年度			
総計	2,400,000	720,000	3,120,000

研究分野：総合領域

科研費の分科・細目：健康・スポーツ科学・スポーツ科学

キーワード：スポーツ社会学、女性、スポーツ、促進モデル、余暇志向、社会心理

#### 1. 研究開始当初の背景

女性のスポーツ活動を言及する際、男性のとの比較によって考察されることが一般的であり、例えば、これまで行なわれてきた「国民のスポーツ活動調査（内閣府）」において、過去1年間に全く運動・スポーツを実施していなかった者の割合を男女で比較すると、常に女性の非実施率が男性のそれを大きく上回っていることが分かっている。こうした女性のスポーツ非実施率の高さについて、繰り返し議論されてきたのが「子育て」「家事」といった役割の問題であった。すなわち女性は男性と比較して、彼女らに課せられた役割に拘束され、スポーツに接近できないという結論である。

しかしながら一方で、スポーツ活動を積極的に実施している女性に焦点を当てると、仕事をもちながら子育て、家事をこなし、さら

に限られた余暇時間内でスポーツ活動を積極的に行なっていることが研究代表者の調査で明らかになった（佐藤, 1995）。翻って、余暇時間を自由に捻出できると考えられている専業主婦は、スポーツ活動に接近するには様々な制約があると感じていたことも分かっている（佐藤, 1996）この制約に着目した研究は、国外の社会心理学の領域において見られ、例えば余暇活動における制約を克服するには、その活動を実施するために必要な生活環境をどれだけ創出できるか（自助努力と他者援助）が重要だと指摘されている（Greeno, 1994）。こうした結果は、女性のスポーツ活動の場面においても応用可能であり、特に余暇環境の創出という点において個々の生活全般に対する考え方、すなわちQOL（Quality of Life）との関連によって何らかの知見が得られると考えた。まず、研究代表者は、スポーツ活動

を含む余暇活動の実施状況と QOL に関する調査を、乳幼児をもつ母親 200 名を対象に行なった (佐藤, 2005)。乳幼児を持つ母親に着目した理由は、育児による拘束時間が最も長く、自助努力と他者援助がなくては余暇活動への接近が最も困難であろうと推測したからである。その結果、何らかの余暇活動を実施している母親は、実施していない母親と比較して QOL 値が高く、生活全般を積極的に捉える傾向にあった。さらに、余暇活動を実施している母親は、そうでない母親と比較して、現在の生活環境を肯定的に受けとめていることが分かった。すなわち、先行研究の指摘どおり余暇活動への接近には、自助努力と他者援助が重要であり、子育て期にある母親であっても生活全般を積極的に捉え、自分自身のための余暇時間を確保することが可能であることが明らかになった。この結果を踏まえ、研究代表者はさらに知見を深めるため、QOL の観点から一歩進んで個々の余暇に対する意識や行動傾向 (余暇志向性) から既婚女性のスポーツ活動を検討し、個々の女性にあった活動モデルの提案が必要であるとの見地に至った。

## 2. 研究の目的

本研究は、既婚女性のスポーツ活動を積極的に推進するための効果的な方策を検討するものであり、得られたデータからどのような背景をもつ女性にスポーツ活動への働きかけをすることが有効であるのか、実証的に検討することを目的とした。

## 3. 研究の方法

### (1) 調査対象：

熊本市に在住する 20~65 歳の男女 2,000 名を熊本市男女共生推進課の協力のもと、住基ネットを用いて抽出した。

### (2) 調査期間：

2008 年 3 月 14 日 (金) ~ 同年 4 月 7 日 (月)

### (3) 調査方法：

郵送法により調査票の配布および回収を行なった。

### (4) 回収率：38.6%

## 4. 研究成果

### (1) サンプルの属性

回収した調査票よりサンプルの属性を見ると、平均年齢は 46.71 歳、男女比は、男性 38%、女性 62% と女性の割合が高かった。また年代構成は、20 歳代が 13.1%、30 歳代が 20.3%、40 歳代 18.3%、50 歳代 27.2%、60 歳以上が

21.1% と 50 歳代の比率が高かった。

表 1 サンプルの男女構成

	n	%
男性	293	38.0
女性	479	62.0
合計	772	100.0

表 2 サンプルの年代構成

	n	%
20 歳代	101	13.1
30 歳代	157	20.3
40 歳代	141	18.3
50 歳代	210	27.2
60 歳以上	163	21.1
合計	772	100.0

### (2) 余暇志向性尺度の構造

28 項目からなる余暇志向性尺度用いてその因子構造を検討するため、個々の余暇に対する意識や行動を表わした 2 つの対比文章

(A 文章、B 文章) を回答者に提示した。回答者は、自分の考え方や行動に照らして「A に賛成 (4 点)」「どちらかと言えば A に賛成 (3 点)」「どちらかと言えば B に賛成 (2 点)」「B に賛成 (1 点)」の 4 段階で回答する。なお、28 項目中には逆転項目がいくつかあり、それらは、すべて逆転した点数を加え分析を行なった。

余暇志向性尺度を構成する 28 項目の因子分析 (主因子法、寄与率で因子数を決定、プロマックス回転) を行なった結果、6 因子を抽出した。第 1 因子は、「目標に向かって自分を向上させたい」「努力すればいつか出来ると信じて行動している」「今楽しいことするのが信条だ (逆転項目)」「余暇に学びをすることは避けたい (逆転項目)」「趣味には、資格取得や技術向上を視野に入れるのがよい」「時間があれば遊びたい (逆転項目)」「面倒でなく、手軽に楽しめる活動がすき (逆転項目)」「趣味でも極めようと思えば、努力は惜しまない」、以上 8 項目の負荷量が高く、従って「長期展望・向上因子」( $\alpha$  係数 = .791) と命名した。

第2因子は、「グループで計画を提案するのはたいてい自分だ」「計画する時、自分はサポート役だ（逆転項目）」「自分が中心になって計画するのが好き」「社交的な場所では、輪の中心になっていきたい」、以上4項目の負荷量が高く、従って「主導性因子」（ $\alpha$ 係数=.764）と命名した。

第3因子は、「余暇時間は、人を誘って一生に何かをして過ごしたい」「余暇時間は一人で過ごしたい（逆転項目）」「自分の趣味は他の人とするものが多い」「余暇時間には、一人で音楽鑑賞や読書をする（逆転項目）」、以上4項目の負荷量が高く、従って「対人関係志向因子」（ $\alpha$ 係数=.754）と命名した。

第4因子は、「体を動かさず方がリフレッシュする」「余暇時間には体を動かしたい」「スポーツ・フィットネスに務めている」「テレビを見たり、音楽を聴いたりして過ごしたい（逆転項目）」、以上4項目の負荷量が高く、従って「身体活動因子」（ $\alpha$ 係数=.752）と命名した。

第5因子は、「自分の時間を利用して、社会や人の役に立ちたい」「人の役に立つことが嬉しいので、余暇時間はそのために使いたい」「人が喜ぶのは嬉しいが、まず自分が優先されるべきだと思う（逆転項目）」「ボランティア活動や地域活動には参加しないと思う」、以上4項目の負荷量が高く、従って「利他主義因子」（ $\alpha$ 係数=.731）と命名した。

第6因子は、「余暇時間は家にいたい（逆転項目）」「ドライブや旅行に出かけるのが楽しい」「外出が好きで、面白いことを常に探している」「映画やコンサートに出かける」、以上4項目の負荷量が高く、従って「外出・直接体験因子」（ $\alpha$ 係数=.63）と命名した。

### (3) 余暇志向性パターンの検討

余暇志向性尺度を用いて、長期展望・向上、主導性、対人関係志向、身体活動、利他主義、外出・直接体験の6因子を抽出した。ここでは因子を構成する各項目の得点を合計し、その値の平均を固有値（因子得点）として余暇志向性パターンを検討する。

余暇に対する志向性を上述の因子得点を用いてクラスター分析（Word法）を行なった。その結果、ツリーダイアグラムから5つのクラスターを検出した。さらに5つのクラスターの余暇に対する志向性の特徴を捉えるため、各因子得点のパターンを図1に表わした。ここでは、各クラスターにおける因子得点の相対的な分布を知るため、Zスコアを用い得点を標準化して表示した（図1）。

第1クラスター（ $n=263$ ）は、対人関係志向因子得点が最も高く、身体活動因子得点および外出・直接体験因子得点が平均値を若干上回っていた。因子全体としては、標準から大きく上下する因子は見られなかったことから

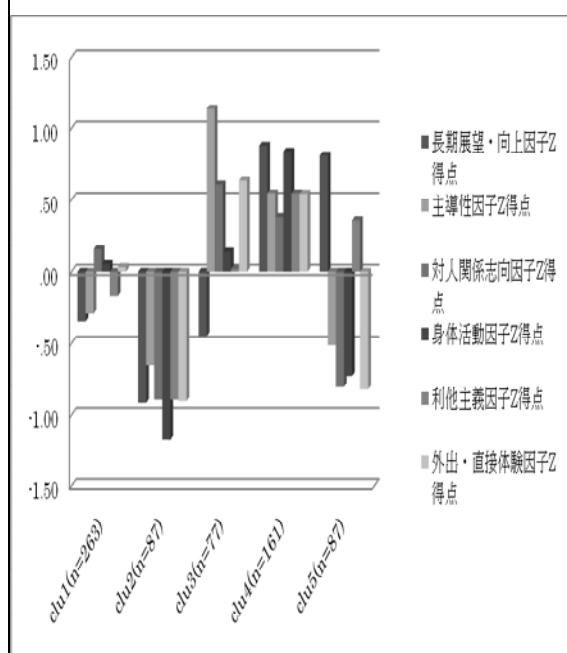


図1 クラスター別余暇志向性得点（Zスコア）

「平準型」と解釈した。

第2クラスター（ $n=87$ ）は、すべての因子得点が標準を下回っており、このことから「消極型」と解釈した。

第3クラスター（ $n=77$ ）は、主導性因子得点が極めて高く、また対人関係志向および外出・直接体験因子得点も標準を上回っていた。このことから、まず何よりも自己を尊重し、今現在を優先するグループであるため「自己中心・現在志向型」と解釈した。

第4クラスター（ $n=161$ ）は、第2クラスターとは反対に、すべての因子得点が標準を上回っており、このことから全クラスターの中で最も余暇志向であり、余暇バランスに優れた「最適型」と解釈した。

第5クラスター（ $n=87$ ）は、長期展望・向上因子得点が高く、併せて利他主義因子も標準を上回っていた。このことから、自己の研鑽に関心があり、また他者に対して自己を役立てることに興味をもつグループであると判断し、「自己啓発型」と解釈した。

以上5グループにおいて、スポーツへの参加を促進するのに有効なグループは、身体活動得点が標準を上回った平準型、自己中心・現在志向型、最適型の3群であると考えられる。中でも特に積極的な働きかけがスポーツ実施に繋がると考えられるのが平準型に属する人々であろう。というのも、最適型はその因子得点が非常に高いが、現時点で既にスポーツ活動を行なっている可能性が高く、また自己中心・現在志向型は、主体的行動傾向が見られ、自発的にスポーツに接近する可能性が高いと思われる。従って、外部からスポーツへの効果的な働きかけが必要なグループとして、身体活動に少しは興味・関心を示してい

る平準型へのアプローチが重要だと考える。

#### (4) 余暇活動の分類

回答者に12項目からなる余暇活動を提示し、項目ごとに「しない(1点)」「まれにする(2点)」「時々する(3点)」「よくする(4点)」「非常によくする(5点)」の5段階で答えを求めた。

その得点をもとに12の余暇活動において因子分析(主因子法、寄与率で因子数を決定、プロマックス)を行なった。その結果、3つの因子が抽出された。第1因子は、「趣味のためのスポーツ」「競技スポーツ」「健康のためのスポーツ」「野外スポーツ」「スポーツ観戦」、以上の5項目で構成されていたため「スポーツ活動因子」( $\alpha$ 係数=.658)と命名した。

第2因子は、「習い事」「文化・芸術鑑賞」「ボランティア・社会活動」「語学・資格取得」「園芸・ペットの世話」、以上5項目で構成されていたため「生活文化・教養活動因子」( $\alpha$ 係数=.599)と命名した。

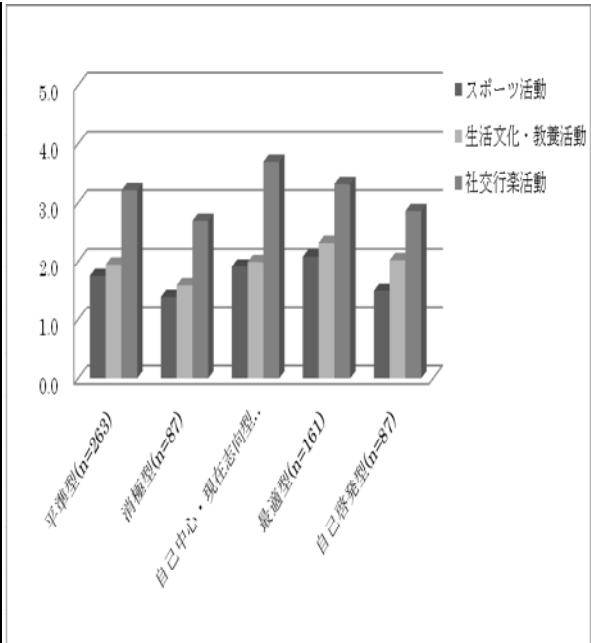
第3因子は、「ドライブ等の外出や行楽」「社交やつきあい」、以上2項目で構成されていたため「社交・行楽活動」( $\alpha$ 係数=.644)と命名した。

#### (5) クラスタ別余暇活動パターンの検討

12の余暇活動を因子分析した結果、3因子が抽出された。さらにその因子を構成する項目の合計得点を計算し、平均値を算出した。その値を固有値として各クラスターで余暇活動因子の得点パターンを図に示した(図2)。

平均値が高いほどその活動が日常的に行われていることを意味する。いずれのグループも社交・行楽活動量が多いことが分かる。また、スポーツ活動量が多い順に最適型、自己中心・現在志向型、平準型があげられる。スポーツ活動を日常化させるために必要な働きかけとして、最適型は、スポーツ活動、生活文化・教養活動、社交・行楽活動どれについても活動量が多く、したがって余暇を全般的に楽しむことができるグループであることが分かる。すなわち、外部からの働きかけが無くても十分スポーツに積極的だと言える。自己中心的・現在志向型は、生活文化・教養活動とスポーツ活動の頻度が非常に接近している。したがって、このグループの特性として、今現在楽しみ、さらに自分本位で行えるようなスポーツの提案により、実施率の上昇が見込めると考えられる。さらに平準型については、最適型並みに社交・行楽活動の量が多いことから、スポーツそれ自体の魅力を伝える方法として、まず社交や行楽を入口にしてスポーツの提案を行い、そこから徐々に日常的な活動へ移行させることが重要だと考える。

図2 クラスタ別余暇活動パターン



#### (6) クラスタ別にみた職業形態

ここでは各クラスターに属する人々の職業形態を見る。表3には実測値および期待値の結果( $\chi^2(16) = 26.880, p < .05$ )を示した。

表3 クラスタ別にみた職業形態の実測値および期待値

		専業主婦	会社員・団体職員	パート・アルバイト	自営業	学生・無職
		平準型	実測値 65	113	37	23
	期待値	52.6	121.2	35.8	30.4	23.0
消極型	実測値	18	35	12	10	12
	期待値	17.4	40.1	11.9	10.1	7.6
自己中心・現在志向型	実測値	9	45	9	7	7
	期待値	15.4	35.5	10.5	8.9	6.7
最適型	実測値	27	74	19	30	11
	期待値	32.2	74.2	21.9	18.6	14.1
自己啓発型	実測値	16	44	15	8	4
	期待値	17.4	40.1	11.9	10.1	7.6

$\chi^2(16) = 26.880, p < .05, \Phi = 0.099$

表4には各セルにおける残差と検定結果を示した。特に有意であったものとして、平準型において専業主婦が有意( $p < .05$ )に多く、自己中心・現在志向型において会社員・団体職員が有意( $p < .05$ )に多く、さらに最適型において自営業が有意( $p < .01$ )に多かった。

表4 クラスター別にみた職業形態の残差分析結果

		専業	会社員・団	パート・ア	自営	学生・無
		主婦	体職員	ルバイト	業	職
平準型	残差	2.447	-1.294	0.265	-1.825	0.562
	検定結果	*	ns	ns	+	ns
消極型	残差	0.172	-1.172	0.047	-0.019	1.788
	検定結果	ns	ns	ns	ns	+
自己中心・現在志向型	残差	-1.937	2.313	-0.527	-0.718	0.115
	検定結果	+	*	ns	ns	ns
最適型	残差	-1.174	-0.032	-0.774	3.219	-0.982
	検定結果	ns	ns	ns	**	ns
自己啓発型	残差	-0.402	0.902	1.052	-0.737	-1.466
	検定結果	ns	ns	ns	ns	ns

\*p<.10 \*\*p<.01

最適型に有意に多く見られた自営業については、余暇時間を捻出しやすい職業形態であることと余暇に対する意識や行動傾向が多彩であることとの因果関係は言及できないが、いずれにしても時間、余暇志向、余暇活動ともに非常に自由度が大きい層だと推測する。したがって、この層に対して何らかの提案は特になく、質の高い余暇生活を維持できる人々だと考える。例えば、こうした人々の余暇生活を広く社会に示し、多種多様な余暇生活のモデルとして提案してはどうであろうか。

自己中心・現在志向型に有意に多くみられた会社員・団体職員については、有効な働きかけとして、単独で行えるスポーツの提案が重要だと思われる。すなわち、このグループの余暇に対する意識や行動傾向は、あくまでも個人を優先するスタイルであり、他者との関係を必要とするスポーツは有効ではない。

本研究のテーマである主婦の活動促進モデルの検討からすれば、専業主婦が有意に多かった平準型に対してスポーツへの積極的なアプローチを行う必要がある。このグループの余暇に対する意識や行動傾向は、身体活動を志向し、対人関係を志向する傾向があること、また余暇活動は、社交・行楽活動量が多いことが分かっている。以上のことから、平準型に属する専業主婦への働きかけは、他者との交流やコミュニケーションを伴うスポーツの提示が必要である。家事や育児に従事する専業主婦は、それだけで外界や他者との接触頻度は少なくなることは想像に難くない。したがって、スポーツを手段として外界や他者とのコミュニケーションを図ることが彼女らの精神的な安定を確保し、より充実した余暇生

活を可能にすると考える。さらに言えば、子育て期にある専業主婦の育児ストレスをスポーツが軽減し、安定した家庭環境や家族関係の維持に寄与すると期待する。

### 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計1件)

佐藤馨、佐橋由美、スポーツ活動参加促進に向けた予備的研究—余暇志向性尺度の開発と志向性がスポーツ参加に繋がる可能性の検討—、びわこ成蹊スポーツ大学紀要、第5号、2-14、2008年、査読無

[学会発表] (計3件)

①佐藤馨、佐橋由美、成人女性のスポーツ参加促進に向けた予備的研究—余暇志向性尺度の開発と志向性がスポーツ参加に繋がる可能性の検討—、日本体育学会第58回大会、2007年9月5日、神戸大学

②佐橋由美、佐藤馨、Examining the Effectiveness of Leisure Orientation Construct as a Framework for Understanding the Factors that Shape People's Lifestyle、10<sup>th</sup> World Congress、2008年10月7日、カナダ・ケベック州

③佐藤馨、佐橋由美、小笠原悦子、スポーツ活動促進モデルの検討—余暇に対する志向性の違いからみたスポーツ活動パターンの分析—、日本体育学会第60回大会、2009年8月26-28日(予定)、広島大学

[図書] (計0件)

[産業財産権]

○出願状況 (計0件)

○取得状況 (計0件)

[その他]

### 6. 研究組織

(1) 研究代表者

佐藤馨 (KEI SATO)

びわこ成蹊スポーツ大学・スポーツ学部・准教授

研究者番号：50326592

(2) 研究分担者

なし

(3) 連携研究者

なし